

熟爛や膝でまるまる猫黒し  
夕焼けの点になるまで鳥の舞い  
霜の夜やひとつ枕に老いた猫

酔花

○皮鯨にんにく葉煮え豆腐煮え  
断捨離の家を支える霜柱  
へろどとす馬力馬力の霜柱

えり

○冬籠するには空が青すぎる  
掃除機に追ひ立てらるる冬籠  
口噤むCOP25冬ぬくし

夕子

○兄ちゃんの靴はでっかい霜の土手  
○ふむふむふうーんふにゆふにゆ冬籠り  
○一叢の温みを手鋏も冬蝶も

万貴

ふるさとの子より便りや冬銀河  
歳時記とノート一冊冬籠  
バス停をひと駅歩く小六月

一枝

機織の二階の女冬籠  
一浪のバイト青年霜を踏む  
雪催の仮設住宅灯の点る

佐和子



文子

固定電話廃止する義姉冬ごもり  
妣の言霜のあたりし菜は美味し  
寒椿クロスえんみょうじの灯籠円明寺  
(伊予の札所寺)

農子

冬籠雲と鳥の遊ぶ窓  
霜の夜「遺物は語る」を読み終えり  
冬田背に芒の群の輝けり

初江

○霜の夜のテーブルにある備忘録  
○冬籠などはしません南座へ  
○出生届出す冬麗の村役場

笛子

○鉄瓶の湯の音せわし冬籠  
冬籠兄の遺品のパイロット  
埴生の宿手押しポンプに霜の花

富江

冬籠絵本が遊ぶ読み聞かせ  
霜の夜は会話続かぬ姉の事  
冬再び名前カムイと無名星

ゆの

○初霜を蹴りそこねたる中二病  
霜柱踏む度胸奥痛くなる  
たとえば君清少納言と冬ごもり

美貴

○借りてきし本は三冊冬籠

○聖樹の灯少しはなれて易者の灯  
お日さまの光り七色霜柱

丞子

○曇天の丘の茶房の冬薔薇  
5Gのスマホの画像冬籠  
学童の指先に摘む霜の花

美和

○歩くより這い這いえらぶ師走の児  
地に縋る三つ股大根引きあぐね  
冬ごもり壁に掛けたる服の増え

郁子

○こだまして渡る夜汽車や冬の川  
霜にほふ朝の静けさ川の音  
冬ごもりできぬこの世の変わりよう

道彦

○栃若のメンコ写真や冬籠  
○冬北斗能登半島の先端に  
朝霜や腫瘍にメスの入った日

味元 昭次 作品

老残を噛み締めている冬籠

骨壺を置く家ありぬ霜の村

老ゆること日々楽しまん霜の朝

